

解題に代えて

井上 芳保（コーディネーター）

ここに掲載するのは、2009年3月7日に開催の「第23回 社会情報調査の方法に関する研究会」にてお招きした阿部真大、大野正和の両報告者による原稿である。同研究会の予定報告タイトルとその概要についてはリーフレットのものをそのまま再録しておく（前頁参照）。ごらんのように労働現場で起きていることに焦点をあてた報告をお願いしたわけであるが、実際の報告内容にかなり加筆していただいたものを掲載することになった。それに伴って報告タイトルも変更になっている。

2008年を思い出してみよう。この年は、格差社会の深刻化がさまざまな形で表面化し、話題になった年として我々の記憶に残っている。例えば『蟹工船』という古めかしいプロレタリア文学がよく売れるという現象が起きていた。フリーターなどの若い人もかなり読んでいたという。内容的に何か共感するものを感じず読者が多いのだろうと思われる。また例えば、「名ばかり店長」という言葉が流行った。サービス業の末端で低賃金による労働強化が著しくなっている。いわゆる「派遣切り」も目立った。自動車産業はじめ大手製造業の多くも末端で相次いで期間契約の従業員の大量解雇に踏み切っている。それらのささやかな後始末の一つといえようが、年末には官庁の聳え立つ霞ヶ関近くの日比谷公園内に「派遣村」が開設された。メディアがその様子を好んで取り上げたが、解雇されて住居をも含めて行き場を失った人たちはそこで新年を迎えたのであった。

不安定な雇用の問題は、現代日本社会の至るところでみられる深刻なものであり、常雇の人にとっても労働現場は生きづらくなっているといえる。監視カメラに象徴されるさまざまな管理のまなざしが職場において強化されている。また職場の中をみると、自己責任と業績主義が強調され、さまざまな管理のまなざしが職場において強化されている。しかも労働組合など弱い立場の人を守る勢力も弱まり、厳しい条件に耐えながら孤立して働かざるを得ない労働者たちが全国的に増えていると思われる。

さらに付言しておくなら、上記の結果としてエンドレスの不安に駆りたてられて無為な消費行動に走ったり、各種の嗜癖に陥ったり、あるいは精神の失調をきたすに至る人は莫大な数に上っている。あるいは自殺者の数は2009年の今年、11年連続で年間3万人を超えている。さまざまな理由から追いつめられて死を選ぶ人がこれだけ多くなった社会に我々は生きているのである。

今回の研究会の企画は、そのような状況が進みつつあることを意識して構想されたものである。労働現場でのフィールドワークを通して、立場の弱い労働者の現実を精密に分析しているお二人の研究者をお招きしてじっくりと研究成果やお考えを伺うことができた。市民の方々も多くつめかけてくれて盛況となった。

阿部論文「これからのコミュニティケア」では、老人介護施設において集団ケアに代わってユニットケアが増えているが、その労

働の現場では働く側の労働強化を招き、膀胱炎や腰痛の人が多発している事実をまず指摘している。ここで利用者のニーズに配慮したユニットケアを求めているのは消費者の側であり、低賃金による労働強化の構造を作り出している責任の一端は消費者の側にもあることが指摘されている。そして社会的企業の可能性に触れている。それは雇用の問題に無頓着な慈善型 NPO とは似て非なるものだ。雇用の問題を解決するためにコミュニケーション的行為としてのケアと医療としてのケアとの分離を主張している。前者についてはボランティアが、後者については介護を専門職とする人が担う形での分業とする案を提示している。さらにキャリアラダーという考え方を紹介して介護職のキャリアアップ戦略に対して国がもっと支援すべきことに言及している。若者の直面する生きづらさについて分析し「自己実現」や「個性」という理念がそれに追い打ちをかけている点にも触れている。若者の活力を生かすためには労働を生活の一部とみなす生活主義の基盤を地域の中で形成していく必要性であるという。

大野論文「職場における関係性の「まなざし」と「存在論的不安」」では、報告時以上に不安について踏み込んだ考察を展開している。「生活の不安」だけではなく「心の不安」に着目すべしと提案している。それは「存在論的不安」にもつながるものだ。「ぼんやりした不安」は芥川の時代に語られたものだが、現代の社会意識を捉えるにあたっても重要な位置づけを有しているのではないかという。例えば、20 代女性労働者による悲痛な内容のブログが引用されている。美容師見習の彼女はパニック障害になったり、自殺未遂を図ったりしているが、かかる状態でなお仕事において認めてもらいたいと強く望んでいる。他方で最近の職場の人間関係においては「人と人との関係」が壊れつつあることも明らかにされている。例えば、労働社会学の研究成果

によると、トヨタの工場現場では非正規雇用の急増の結果、堪え性がなく、気が利かず、責任感が乏しく、職場の暗黙のルールが読めない人員が増えているが、「あいだ」というヨコの構造に大きな地殻変動が起きているためタテの関係がより対立的なものになること、労使関係の悪化などはヨコの人間関係の崩壊に関わる「存在論的不安」に起因することなどを指摘している。

いずれも労働の現場から見えてくるミクロな状況から問題状況を捉えつつ背後に横たわるマクロな変化にも鋭敏で興味深い内容である。グローバル化の構造の中で我々の生活にさまざまな変化が生じている。粗っぽく言えば、不安や生きづらさの源泉はグローバル化の構造にあるのだろう。就中、たゆまぬリスク管理を自己責任で全うできる成員とそれ以外の社会成員との分断という構図が強まっているように私には感じられる。グローバル化にあっては福祉国家が不安定な生活をする層に対して社会保障・社会福祉の水準を低下させつつある。社会保障から治安・管理へと重点が移動しているし、社会的排除が強化されつつあるともいえる。上層の人たちはリスク回避の術を保険技術などにより有している。他方で下層の存在は危険なリスクにならないよう予防的に治安・管理されていく。こうして健康不安や犯罪不安が問題化してくるわけだが、この重要な論点のさらなる展開については他日を期したい。

いずれにせよ、我々自身が身近に感ずる生きづらさをどう打開していけるのか、個に分断された人間同士のつながりをどうしたら回復していけるのか、労働現場に焦点をあてての今回のお二人の指摘内容からは考えさせられるところが少なくなかった。

なお、テープ起こし作業にあたっては、村山友則さん（札幌医科大学医学部学生）にご尽力いただいたことを記しておきたい。